

三ヶ月前、年上の彼氏が出来た。

かつこよくて優しく、私なんかには勿体ないくらいの人だ。

誰もが知っている有名な総合商社に勤めている上に、その辺のアイドルをものともしない華やかな顔立ちのイケメン。

私が困っている時は必ず駆けつけて助けてくれる、そんな完璧すぎる彼氏。

けれど、ひとつだけ彼について困っていることがある。それは――

「もうっ……こ、今週は、えっちするの、禁止です……っ！」

「え……っ？」

超絶テクの絶倫すぎる、ということだ。



あまごころ

絢辻 透

ことの発端は、付き合つた時まで遡る。

超絶テクの絶倫彼氏こと、一ノ瀬 蓮さんとは、バスで通学中、迷惑なおじさんから助けて貰つたことをきっかけにお付き合いをすることになったのだが。

その時——いや、その前から今に至るまで、私と蓮さんはほとんど毎日エッチなことをしているのだ。

(今週なんか、もう一週間、連続で何回もシてるんだもん……!)

大学が春休みに入つてからというものの「結婚生活の予行練習しようか」などと言つて長めの有給を取り、私をタワーマンシヨンの自宅に住まわせて毎日のように触れてくるようになった。

それはもちろん嬉しいし、気持ち良いのだけれど。

(気持ち良すぎて毎回訳わかんなくなつて、私が気絶して終わりだし……)

今日もまた気絶して、ベッドの中でようやく目覚めたところだ。

気絶した後、私が寝ているうちに身体を清められ、ふわふわのパジャマを着せられて、私のためにと買ってくれたクイーンサイズの天蓋ベッドに寝かされて起きるといふ日々を丸々一週間送っている。

その時には必ず美味しいものが用意されているし、まるでどこかのお姫様のような扱いではあるのだが。

「……優菜、とりあえず、少し食べながらお話しようか。喉も乾いてるだろうから、紅茶とお菓子持ってきたよ」  
「あ、ありがとうございます……っ」

蓮さんは、彫刻と見紛うほどの美しい顔面を憂いに満たしながらも私を氣遣うように声をかけてくれた。

手には私の好きな紅茶とシュガーラスクの載ったトレイを持っている。私ができるタイミングを察して淹れておいてくれたのだろう。

(普段の生活での蓮さんは……本当に、私にはもったいないくらいの彼氏さんなんだけど……)

ぐるぐる考えているうちに、ベッドの縁に腰掛けた蓮さんが私の顔を覗き込んできた。

「……そんな顔をさせてごめんね。僕とのセックス、気持ち良くなかったかな」

「いえ、違うんです……！ 逆、というか……っ」

「逆？」

「気持ち良すぎるんです……いつも私が気絶しちゃって、蓮さんにお世話させてばかりで」

「ああ、そんなの気にしないで？ 僕は優菜のお世話も好きでやってるんだから。すやすや寝てる可愛い優菜の顔見ながらお風呂入ったりするの、すごく幸せだよ」

「そ、そう言ってもらえるのはありがたいんですけど！ でも、こんなの……」

「こんなの……？」

ふわふわのベッドの上で、ヘアオイルの塗られた髪をいじりながら俯く。髪も服も知らない間に綺麗に整えられる日々で、大学の友達には「彼氏できてからどんどん綺麗になるね」と言われるばかりだ。私は何もしていないのに。

それに、何より。

「春休み中こんな感じだったら……学校始まって、集中できなくなっちゃうので……」

「……毎日シてたの思い出して、学校でも僕のちんぽ欲しくなっておなか疼いちやうから、つてこと？」

「づっ……」

綺麗すぎるお顔でそんなに露骨な言葉を使わないほしい……と思いがら渋々頷くと、途端に花が咲いたような笑顔を見せられてドキッと心臓が高鳴る。

未だにこの顔面の良さに慣れないんだよなあ、と思っっていると不意に顔を近付けられて、ちゅ、と柔らかな触れるだけのキスをされた。

「わかった、じゃあこれからは優菜のおなかが疼かないくらいエッチなこ  
といっぱいして満足させるよ。もつと満足できるように、優菜が寝てる間も

「そうじゃなくつてええ……!!」

「???」

僕何か変なこと言ったかな？ みたいな表情で首を傾げられて力が抜ける。

こんな格好良くて優しいのに、なぜこうも私とのエッチのこととなる  
と突如常識がバグり散らかしてしまうのだろうか。

私は必死に頭を回転させ、言葉を選びながら説得を試みた。

「えっと、集中できないのもあるんですけど、体力がもたなくて……!!  
もちろん蓮さんと、その、えっちするのは幸せなんですけど、ずっとぐった  
りした私ばかり見せたくないと言いますか……っ」

「優菜……」

「蓮さんも今週はお仕事休めない、忙しい日があるかもしれない、って言うてましたよね？ だからその、せめて今週は……」

「そっか、色々気にさせちゃってたんだね……ごめん、優菜。わかったよ」

長めの前髪から覗く、ビー玉のように綺麗な瞳が私を真剣に見つめる。いつも私より少し暖かな、細く長い指が私の手に重なってようやく、ホツとした。

どうやら分かってくれたようだ。

そつと握り返した瞬間、蓮さんがふわりと笑いながら言った。

「じゃあ今週は、ポリネシアンセックスしよっか」

「はっ？」

謎の単語を言われて哑然とする。

ぼり……何？　なんか最後、せつくす、って言った？

全然意味が分からない。分かったことといえ、とにかく私の言いたいことが、蓮さんに全く伝わっていないであろうことだけだ。



ポリネシアンセックスとは。

合計五日間をかけたセックス——最終日以外は、挿入以外の愛撫だけに留める。

毎日の愛撫も最低一時間をかけ、挿入した後も三十分はピストンを行わず、動かさない。

「一日目はこれをするとか、二日目はこれをするっていうのもあるけど……  
：最初から色々説明されると、作業みたいになっちゃうかもしれないし、やりながら覚えようか」

「はっ、はい、……ん？ ……????」

隣に座る蓮さんに、スマホでポリネシアンセックスのやり方が書かれた



長い睫毛を揺らして様子を伺うようにこちらを覗き込んでくる蓮さんにまた心臓が跳ねる。誤魔化すようにシユガーラスクをかじりながら、私は視線をうろつかせた。

この顔に弱い。少し伏せられた脛から覗く綺麗な瞳と目が合ってしまうといつも断れない。

(……いつも思うけど、蓮さん、私とのこと、すごく大事に考えてくれるんだよね。え、えっちなことも、私のことが好きだから、したいって思ってくれてるんだろうし、それはすごく嬉しいし……っ)

「……わかりました。五日間だったら、最後の日はちようど週末ですもんね」  
「ふふ、うん、ありがとう。その代わり、週末はたくさん優菜のこと可愛がって良い？」

「~~~~~……は、はい……!」

思わず顔が熱くなる。週末に限っては激しくさされてしまう気はするけれど、この日までに体力を温存しておけばなんとかなるはず——そう思っ

頷いた、その瞬間だった。

とき、とベッドへと身体が沈む。

「きや……っ」

「ありがとう、優茉。大好きだよ……一日目はキスだけの日だから、沢山キスさせて」

私の身体を横抱きにした蓮さんに甘く囁かれて目元がとろける。

こくと小さく頷いた瞬間、蜂蜜みたいなトーンの「可愛い」という言葉と共に深い口付けが降ってきた。

「ん……♡ ふ、……んう、っん、~~~~~……♡」

「ふ……お砂糖ついてて甘いね、優茉の唇。ずっとキスしてたくなるな……」

ペろ、とシュガーラスクを食べた時についてしまったらしい砂糖を舐められて身体が震える。それを見て笑った蓮さんがまた、ちゅ♡ ちゅ♡と甘ったるいキスをくれるから、どんどん身体力が抜けていった。

こうやって蓮さんと過ごす時間はやっぱり好きだなあ、なんて思った矢先――  
ぷち、とふわふわのパジャマのボタンを外されてしまった。

「っ？♡ やっ……蓮さん、な、なんで、服……？」

「ん？ キスするだけだよ。今日はキスだけの日なんだから、優菜の身体の全部にキスさせて？」

柔らかな笑顔で当然のように言われて何も言えなくなる。そうしているうちに額や頬へ何度も唇を押し付けられながらパジャマを脱がされてしまった。

寒くて擦り寄ると蓮さんが嬉しそうに私を抱き寄せ、首筋にちゅつと吸い付いてきた。

（こんなにキスされるの、くすぐったくて、ちよつとだけ不思議な感じ……いつも舌入れられて、大人のキスされて……頭がぼーっとしてるうちに、気持ち良くされちゃうし。でもこれなら体力も使わなさそうだし、気絶する心

配は……っわ、なに……!?)

ふわりと身体が浮く。腰を支えられてなぜか下も脱がされ、あつという間にキヤミソールとパンツだけの姿にさせられてしまった。

どうして、と思っている間に蓮さんの唇が胸元へと這っていつているのが見えて思わず身体を引く。

「っ???♡ 蓮さ……ま、って、なんでこれ、っんうっ!?!♡」

「言っただでしょ? 全部にキスするって。優菜、おっぱいもすっかり敏感になったよね……脇の近くの、横のところすりすりされるだけで身体振っちゃって……可愛い」

すりすり♡ むにゅ♡ さささささ……♡

キスするだけって言ったのに。そう思うのに蓮さんはふにふに♡ と私のおっぱいを優しく揉んで、触られるとぞくぞくしてしまふ横のところを何度もさすってきた。

慌てて服をぎゅつと掴む。

「き、今日は、きす、だけってえ……っ！」

「うん、キスだけだよ？ ほら、こうやって……優菜のかわいいおっぱいにキスしてる……♡」

「ひゃうっ♡ うう、でも、これ……うあっ♡ だっだめ、蓮さん……っ♡」

布越しに硬くなってきたしまった乳首にチュッ♡ と吸い付かれてぞくと背筋が震えた。

恥ずかしさでいっぱいになった頭で必死にどうしよう、と考える。いつも触られていたせいとか、身体が止まらない。

今からエッチなことをする、ってスイッチが入ってしまったみたいだ。

「ダメじゃないでしょ？ 優菜のおっぱい、僕にキスされるの嬉しそうにしてるよ。ほら、ぴくぴくして、もっとしてって言ってるみたいで可愛い……ん、ちゅ……♡」

「やっああ♡ だめッ、蓮さん、吸わないでっ……ンらぐ~~~~♡♡」



(やだ、何これえ……♡♡♡ サイトにはこんな、おっぱいにキスするなんて、書いてなかったのに♡ ポリネシアンセックスって、もつとソフトなやつじゃないの……っ？ こんな、あつダメ♡ 乳首舌でこねないで♡ うう♡ キスだけなのに……おまんこ濡れてきちやう……っ♡)

「優菜……そうやって、ヘコヘコ子犬みたいに腰振ってるのすごく可愛い……♡ 毎日僕とエッチしてたから、乳首吸われたあとはもつとエッチなことするって、覚えちやったんだね……？」

「~~~~~ふ、ううづ♡ それは、だつて、蓮さんが……ひやうっ！？♡」  
「そうだよね、僕に教え込まされちやったんだもんね。じゃあ今日も僕が教えてあげる、今日はキスだけだよ、おまんこずぼずぼしないよ、っ♡」

ちゅ、ちゅっ♡

にゆる♡ れろれろれろ♡

悪戯っぽく吸い付かれては先っぽを舌尖でほじられて、余計に下半身に疼きがたまってしまふ。

目を細め甘い声で囁く蓮さんはまるで天使のようなのに、言っているこ

ともやっていることもえっちすぎでくらくらした。

必死になって、回らなくなってきた頭に、今日はキスだけ、おまんこずぼずぼしない、と言い聞かせる。

「ふう♡ ふう♡ ぐう……っ~~~~く、ンン……♡♡」

「えっちな息してこらえてるの可愛い、乳首気持ちいいね……優菜、いつもより興奮してる？」

「っ!?! し、してないい、っブ♡ あっ♡ や、やら、さきっぼだめっ♡」

「先っぼ好きでしょ? ああそっか、いつもおまんこぽっかり構ってたから……おっばいが嫉妬しちゃってたんだね。こっちにもたくさん好き好きってキスしてあげなきゃ……ン、好きだよ、優菜……好き……♡」

「ちが、ッお♡ やっ……れんさんっ♡ もお、だいじょうぶ、っお♡♡ すきすき、へいき……だから、やめ、っあああ~~~~ッ♡」

ちゅ♡♡ ちゅう~~~~っ♡ にゆるにゆるにゆるにゆるっ♡

勃起しきった乳首を抜くように吸い付かれて舌先でよしよし♡ するみたい撫でられて濁った声が出る。浮いた腰が下がない。勝手にもつと快

感を求めてしまう。

（うう、全然やめてくれないよお♡ さきつぼちゅつてされる度、腰、ういて♡ にゆるにゆるされる度、気持ち良くなっちゃうけど、キスだけなんだから、我慢しなきゃ♡ これ、キスだから……腰ゆらゆら揺れちゃうけど、がまん、がまん……っ♡♡）

「ねえ優菜、そんなに腰ふりふりしておまんこアピールされちゃうと、僕も我慢するのつらくなっちゃうんだけど……?」

「ッあ、ご、ごめんさ……っあえ?♡ つな、なに、あづっ!?!♡」  
「つと……こうやって、僕の足で閉じて抑えてたら、おまんこアピール出来ないでしょ? ああそうだ、両手も上で組んでおこうか。気持ち良いからっしてシート掴んじや駄目だよ、今はおっぱいにキスされることだけ、集中して」

覆い被さってきた蓮さんに太ももをぐつと抑えつけられて、強制的に足を閉じる体勢にされる。その上、両腕とも束ねて頭の後ろに回されてしまっ

た。

まるでおっぱいだけを差し出すような体勢で、あまりにも恥ずかしい。

「やあつ、やです、蓮さんつ、はずかしい、これ……っあ、あ……っ？？♡」  
「恥ずかしい、って言いながら期待しまくりのエッチな顔してて可愛い……♡ ほら、今から優菜のおっぱいの先っぽとディープキスするから、よく見ててね……？」

蜂蜜みたいな声と共に形の良い唇が開いて、ぼつてりと膨らんだ乳首をばくっ♡ と啜えられてしまった♡

ぢゆるぢゆるっ♡ とエッチな音が響く。蓮さんのお口の中で吸われては捏ねられ、挙げ句にはほじられて、頭が痺れるような快感が襲ってくる。それなのに。

（気持ちいいの、逃がせない……っ♡ 腕組んでおっぱい差し出してるのだけで、ぞくぞくしちゃうのに♡♡ 足も腰も抑えつけられてるから、みっともなくおまんこヒクつかせることしかできなくて♡ どうしよう、私……）

このまま、じゃ……っ♡♡)

「く、うぐ……っ♡ ふうぐ……っ♡♡ れん、さんっ……だめ、これ……私、っお!?!♡」

「右ばっかりキスしたら左の乳首が嫉妬しちゃうよね？ 左にも沢山キスしてあげる……右側は指でよしよしって、撫でてあげるからね……♡」  
「やああお……っ♡♡」

ちゆる♡ れるれるれるっ♡

こしこしこしこし……♡

反対側にもキスされるのと一緒に、吸われてパンパンに勃起してしまつた乳先を可愛がるみたい撫でられて頭に火花が散る。今まで感じたことのない熱が押し寄せてきて、きゆううっ♡ とおまんこが締まっていく。無意識に足先にまで力がこもって、ピンッ♡ と伸びてしまった。

「ああダメ♡ これだめ、蓮さんっ、蓮さあんっ♡ わたひ♡ もお、ほん  
とにらめっ、いく、イっちゃやうからっ、あ、あ、あー……っ♡」

びくんっ♡ ぶるぶる♡ かくかくかく……♡  
抑えつけられた身体が小刻みに揺れる。私は思い切り背筋を仰げ反らせ、  
乳首だけの快感で、イってしまった……♡

「ふ……優茉、今日はキスだけの日だったのに、乳首気持ち良くてイっちゃったの？」

「はっ、へえ……♡ ふうう……♡ ご、ごめ、にやさ……っ」

どこか揶揄するような言葉に顔の熱が収まらない。

息を整えている間も絶え間なく、お腹や太ももにもちゅ、とキスをされる。その度にぴくぴくと反応してしまうのが止められなかった。

「ふふ、いいよ。本当はもつとキスしたかったんだけど……今日はここまでにしようか」

「はえ……？ あっ……は、はい……？」

「すごく可愛かったよ、優茉。体重かけちゃってごめんね、痛いところとか、

ない？」

名残惜しげに離れていった蓮さんが何うように顔を覗き込んできて、慌てて「ないです」と答えたところ——そういえばこれがポリネシアンセックスというものだったと、いうことを思い出した。

本当にこういうものなのかというのは疑問だけれど、とにかくここまでで終わりにしてもらえらるなら気絶は免れたということだ。  
私はほっと胸を撫で下ろした。

少しだけ——ほんの少しだけ、お腹の奥が寂しい気もする、けれど。

それは気の所為ということにしておこうと思ひ直し、ようやく余韻が抜けてきた身体を持ち上げた私に、蓮さんは笑顔でこう言った。

「明日は二日目だから、おまんこへのディープキスまで解禁しようね♡」

……ポリネシアンセックスとは、本当にこういうものなのだろうか。



「ひっ♡ ひい♡ これ、これむりっ♡ 蓮さんッ、はなひ……っああっ♡♡」

「ン……ごめん優菜、もう少しだけキス、させて」

二日目。

寝室にはもうずいぶん長く、卑猥な音と私の恥ずかしい喘ぎ声が響いている。

蓮さんはお仕事から帰ってすぐに私をベッドへと連れ去ってしまった。

♡ どこか余裕ないキスと一緒にスカートを捲られて、あっという間にちゅっ♡ とクリトリスへキスをされた。

（こ、こんなに余裕ない蓮さん初めてで、ちよつとドキドキしちゃう、これがポリネシアンセックスの効果なのかな……あ♡ それダメ♡ 蓮さんに



ろうか。

うずうずするおまんこから、嬉しいって言うみたいに愛液が溢れていくのを止められない。

「すごい、愛液止まらなくてお尻まで垂れてきちゃってるよ、優菜……♡  
おまんこキス嬉しいんだね、もつと沢山しようね……」

「♡♡ むりっ、ほんとに……うう、わたし……っこれ、すぐいきそうに、  
なっひやうからあ、っあ♡♡ あ♡♡ ああー……っ♡♡♡」

っんっんっ♡ れ~~~~♡ こりゅこりゅこりゅ♡♡

悪戯っぼくっつかれたかと思えば、裏筋を伝うように舐め上げられる。必死に伝えたのにちっともやめてもらえなくて、ひくひく♡ とおまんこが何度も痙攣してしまった。

「ふふ、もういきそうなの？ 昨日キスだけだから焦れちゃったのかな……  
でも、まだポリネシアンセックス二日目だよ、優菜。恋人同士のデープ  
キスしてるだけなんだから、いくのはもうちよつと我慢して……？」

「ふえ……っそ、そんな、むり、あ♡ あっ、うづう~~~~っ♡♡」

我慢して、って言うのにクリトリスにゆこにゆこ♡ 舌を絡めるのはやめてくれない。

そもそもこんなにいきやすくなつたのも蓮さんのせいなのに。抗議の言葉を言いたくても口からは情けない喘ぎ声が出るばかりだ。

必死に我慢しようとお腹に力を込めるけれど、ぬるぬるのおまんこがきゅうう……っ♡ と収縮するだけで、むしろもっといきたくなつてしまつて全然意味がなかつた。

「優菜……そんなにおまんこくぱくばさせて、イかせてえ♡ ってアピールするのずるい……」

「ッ!?! し、して、にやいい、っあジ♡ あうっ♡ 蓮さんっ、それだめ、吸うの、きもちよすぎるからあっ♡♡」

「ああ……本当だね、またナカから愛液とぷっ♡ って溢れてきたよ……僕のちんぽでイかせて欲しいんだね、……可愛い♡」

ちゅむ♡♡ れろれろれろ♡ ちゅうう~~~~~:.....♡♡

柔らかく吸われる度には♡♡ は♡♡ とエツチな息が出てしまう。私は気付けば、抑えつけられてもいないのに、昨日みたいに足先をピン♡♡ と張ってイく体制を整えてしまっていた。

少しでも我慢しようと必死に呼吸を繰り返して快感を逃がす。

「くう……ううう♡♡ ンふぐ♡♡ つく、ふぐ~~~~~:.....♡♡♡♡」

「ふふっ、気持ちいいの我慢つらいね？ くう~~~~♡♡ ってワンちゃんみたいなの声たまらない……もう、しようがないなあ♡♡ いいよ、イって。キスするのはやめられそうにないから……それでもいいなら、だけど」

いつも私と話す時にだけ発せられる、甘やかな声が段々と低くなる。それと一緒に開いた足の付け根をぐ……つと掴まれてしまった。

「——え、あつだめ、これ、動けない……♡♡ そういえば蓮さん、筋トレ日課にしているから、めちゃくちゃ力強いんだ……どうしょ、こんな抑えつけられてクリ、吸われちゃったら……♡♡ すごい、きちやう……♡♡♡♡」

ドキドキと心臓が鳴ってしまふ。恐る恐る下を見ると、気付いた蓮さんが目を細めて笑いかけてきた。

いつもの優しい笑い方じゃない、ご馳走を目の前にした獣みたいな表情に、ぞくりと背筋が沸き立った。反射的に逃げようとする身体を抑えつけられ、おまんこへと濡れた唇を寄せられる。

——ぢゆるるるるっ♡♡♡ ぢゅぱっ♡  
れろお……っ♡ れろれろれろ♡♡♡

「ひい、おああ~~~~っ♡♡♡ だめ、れんしゃんっ、蓮さあんど♡♡♡ アツ♡♡♡ きちやう、もおだめ、いきゅうっ♡♡♡」

「ん……いいよ、ほら、目逸らさないで？ 誰とキスしてるのか、ちゃんと見ながらおまんこアクメキメようね……♡♡♡」

「あっ♡♡♡ あっだめえ、蓮さんに♡♡♡ おまんこきす、されながらあ♡♡♡ イっちやうづ、っあッうあ、ああお~~~~♡♡♡」

ビクンツ!!♡ びくびくびくっ♡

とろ♡ とろとろ♡ たらああ~~~~♡……♡♡♡

背筋が仰け反る。ビクつく腰を腕でがっしりと抑えられたまま、私はいつてしまった……♡

抑えつけられた分おまんこのナカが収縮してしまつて、愛液が溢れるのを止めることができない。余韻に浸る間もなく、溢れる愛液を舐め取られてびくん♡ と身体が揺れてしまった。

「はあ、優菜のイキたておまんこほかほかで美味しい……おまんこキスつて言えて偉かったね、いい子いい子……♡」

「つうあ!?!♡ あつやあ、だめ、いったばかり、だからあ……♡♡♡」  
「言ったでしょ? やめられそうにない、って……ん、ぢゅ……♡♡」

まだ痙攣が収まらないのにぢゅぷぢゅぷ音を立てて吸われてしまう。敏感なクリを飴玉みたいにしやぶられて、ずつとイっているような感覚が続く。

「ふあ、つああ♡ もお、やっ♡♡ くり♡♡ おかひく、なっひやうう……♡♡」

「もしかして甘イキ繰り返してる……？　すごいね、入口ヒクヒク止まらないね……大丈夫だよ、優菜のさみしがりやなおまんこにも、キスしてあげるから……ん、ぢゅ……っ♡」

離して欲しくて言ったのに、むしろ腰を抱えられてしまった。ひ、と喉奥で悲鳴が出てすぐ、熱っぽい吐息と共にぬろ〜っ♡　と舌先がおまんこのナカへと入ってくる。

（ああダメ♡　いったばかりのおまんこ優しくにゆるにゆる広げないで♡　こんなの、気持ち良すぎて……うう♡　どうしよう、蓮さんの……お、おちんぼ……ほしく、なってきちやう……♡♡）

いつもならこの後、蓮さんの硬くて大きなおちんぼで、一番奥をとんとん♡　されて、イきすぎて訳がわからなくなっってしまうけれど。

今日はディープキスまでだから、きつと挿れてはもらえないのだろう。

「……何か想像してる？ おまんこきゅんきゅん締め付けてきてるね……  
本当、ちんぼ媚び上手で困っちゃうなあ……」

「……っ♡ うづ♡ だって、こんな……きもひ、よくて、えあ♡ あんツ♡  
ずぼずぼ、だめえ……♡♡」

ぬぼっ♡ ぬぼっ♡ ぬぢゅぬぢゅ♡ にゆるる~~~~っ♡♡

おちんぼでするみたいにな、あったかい舌先で入口の浅いところをピストンされてたまらない気持ちになる。さっきイったばかりの感覚がずっと引かない。深いところに連れて行かれたまま戻れない。

「ん、ふふ……クリの先っぽびくびく揺れて可愛い……よしよし、放っておいたりしないからね……♡」

「ああんっ♡ やあっあお♡ だめ、両方、りょうほうだめえ、これ、また  
いっぢやううっ♡♡」

なでなで♡ ぬりゆぬりゆ♡

ぬぼぬぼぬぼっ♡♡

指腹で愛液まみれのクリトリスをなでなで♡ されながら舌を出し入れされて首筋までも仰け反っていく。犬みたいな短い息が止められない。

私はほとんど無意識のまま、蓮さんのお口におまんこを押し当てて腰を揺らしてしまっていた……♡

「ン……♡ 優菜からもキスしてくれるの嬉しいな……いいよ、たくさんずぼずぼするから、僕のちんぼ想像してお腹きゅんきゅんさせながら、イチやおつか……?」

脳の奥までじゅわりと溶けていくような囁き声がたまらない。促されるように腰を上げられ、ずぼずぼ♡ ぬぢゅぬぢゅ♡ と舌を出し入れされて、どんだん頭の中が真っ白になっていった。

「はっ、うづ♡ ン♡ いく、いきゅっ、うお♡ お♡ らめっ、出ちゃうう、あああ~~~~♡♡♡」

ぷっしやああ……っ♡♡♡ びくびくびくっ♡

かくかくかく♡ しょわああ……っ♡♡♡

絶頂と同時に、勢いよく潮が噴き出てしまった♡

たくさんえつちなことをしているうちに潮吹きというのが癖になってしまったみたいだ。蓮さんの綺麗な顔が濡れてしまうのに、気持ち良すぎて止めることができない。

それどころか味わうように口を押し付けられ、ごくごくっ♡ と飲まれてしまった。

「ん……ふふ、優菜のいき潮美味しい……♡ すごいね、まだ二日目なのに、優菜の身体とろとろになっちゃったね……」

「は、っう、うづ……♡ そんなの、のんじゃ、だめなのにい……♡」

「駄目じゃないよ、優菜が僕とのおまんこディープキスで気持ち良くなってくれた証拠なんだから。でも二日目だから……今日は、この辺にしておうか」

「あ……え、？ お、おわり……ですか……？」

「うん、帰ってすぐなのに、がつついてごめん。優菜が可愛すぎて我慢でき

なくなっちゃった」

力の抜けた身体を優しく抱きしめられる。  
もじ、と太ももを擦ると蓮さんの硬くなった股間が当たった。

(蓮さんの、硬くなってる……。いつもだったら、この後、お、おちんぽ挿れられて……やだって言ってくれてもやめてくれなくて、沢山、好きだよ、可愛いよっていっぱい言ってくれて、それで……)

悶々と考えていると、額に優しいキスが降ってきた。

何も言えずにそっと目線を向けると、困ったように眉を寄せて微笑む蓮さんの顔が見えて——そんな顔されたら、我慢できなくなっちゃうよ、と。

囁かれた瞬間——スマートフォンバイブ音が、部屋に響いた。

「わっ……あ、も、もしかして会社……」

「……。……少し待ってて、優菜」

夜かかってくる着信は、今まで一度の例外もなく会社からだった。蓮さんの目が一気に据わる。

普段見ることのない、どこか不穏な気配を漂わせながら、蓮さんは部屋の外へ行ってしまった。

（ちよくちよく、こうやって電話かかってくるから……蓮さんの会社、きつとすごく忙しいんだろうな。今日も少し帰り遅かったし……大丈夫かな）

まだ燻る身体を深呼吸で沈め、せめて自分が汚したシーツはなんとかしなきゃと思つてベッドから降り、ベッドを整えていると――

気怠げに戻ってきた蓮さんが、沈んだ声でこう言った。

「ごめん——優菜。明日出張になって、帰って来れないかもしれない」